

地域にある資源を活かして、「環境」で町づくりをしている自治体が、全国にはたくさんあります。そんな「エコ町」の取り組みをいくつかご紹介しましょう。

文／柳澤美帆
写真／石原敦志

風と光と木々と。

高知県梼原町

梼原町は、高知市内から北西へ車で約2時間、愛媛県との県境にある人口4万3千人の町だ。町面積の91%を森林が占め、日本三大カルストのひとつ四国カルストを有し、また最後の清流とされる四万十川の支流・梼原川が流れる、自然の豊かな地にある。

とはいえ、それは言い換えれば、山に囲まれ平地が少なく、都市からの交通の便も悪いというマイナスの要素でしかない。しかし、それを逆手にとった取り組みが、町に勢いをもたらしている。

始まりは、平成4年から開始された「千枚田オーナー制度」だ。いまや全国で見られる田んぼのオーナー制度だが、その発祥は、ここ梼原町。作家の司馬遼太郎が「竜馬脱藩の道」

写真／東西25キロにもわたる四国カルストに建つ2基の風車。空気が澄む冬場は、眼下に雲海が広がり、また高知には珍しく一面の雪景色も見られる。夏はその足下に褐毛の牛が放牧されるなど、四季折々に美しい風景が眺められる観光スポットにもなっている。



が通る梼原町を訪ねてきた際に、「農業が築きあげた日本のピラミッド。万里の長城にも匹敵する」と驚嘆したという、神在居地区の幾重にも重なる千枚田は、農業をするには困難な土地をなんとか切り拓いた、先人の知恵が美しい景観となって連なっている。だが当時、田は後継者不足のために遊休地が目立ち始めており、対策が急がれていた。そこで町が「千枚田オーナー制度」を創設し、募集をかけたところ、16区画に400件の応募が殺到。電話は一日中鳴りっぱなしで、関西圏だけでなく、東京や千葉といった遠方からの問い合わせも多数あったという。

この制度で千枚田の景色を保つことが出来た町が次に取り組んだのが、

いま町のシンボルともなっている風力発電だ。「風をおこし、町をおこす」がキャッチフレーズで、標高1300mの四国カルストに2基の風車を建てている。新エネルギー・産業技術総合開発機構や電力会社からの補助金・負担金を受け、平成11年に設置した。風車で発生した電力を四国電力に売電しているが、その収益は年間約4千万円にもぼる。それを「町環境基金」として、他の自然環境保全のための施策推進に使っている。

その一例が太陽光発電システムを導入した際の補助金だ。住宅用システムを購入すると、1kWあたり20万円、最大4kW80万円までの補助金が町から支給される。現在1800戸の

バイオマス、町を廻る。 福島県いわき市

映画『フラガール』の舞台となった、福島県いわき市。炭坑の閉鎖にもめげず、アイデアをもって一大リゾート施設を作り上げた民間パワーが、この地には根付いているのかもしれない。今度は環境産業で、経済を活性化させるべく力を入れている。トラスト企画株式会社は、そのトップランナーだ。バイオマス資源をガス化する装置を独自で開発し、全国から注目を集めている。福島県は桃の産地としても有名だが、桃の缶詰工場から出る種や、トマトの水耕栽培場から出る茎などの産業廃棄物、また、山から出る間伐材や建築廃材などの原料を、廃食油精製時の副生物であるグリセリンを熱源とした乾燥装置（キルン）へ投入する。そして、850～1100℃の高温下でガスを発生させ、発電機を回すことで、電力と排気ガスの熱を利用し温水を

上／トラスト企画が開発した「バイオマスエネルギー発生装置」。「人に例えると、定年退職した人の再雇用のようなもの。初期使命が終わったエネルギーを人のために再利用する環境に優しい装置」と宮野悦甫社長
左頁右2点／ペレットストーブと「いわき産ペレット温丸」。灯油ストーブよりも熱効率が高く、強制排気を取り入れた安心設計。



取り出し、これらを隣接するペットボトルリサイクル工場で利用している。ここで使用する廃食油の回収も自ら整備した。市内にあるスーパ―に回収ボックスを設置して、家庭から出る廃食油を回収。さらに飲食店や事業者からの回収は、廃棄物収集処理業者やビル管理事業者らとのネットワークを構築することにより、昨年度は60万リットルもの回収を達成。そこから51万リットルの軽油代替燃料を製造した。

もうひとつ大きな期待が寄せられているのが、木質バイオマスペレット

の活用事業だ。いわき市は、北日本有数の木材の中間処理業者がおり、大手製紙業者へ原材料を供給する遠野興産株式会社では、木材加工の際に出るおが屑を利用して、高カロリーの熱を放出する高品質の「いわき産ペレット温丸」を製造している。このペレットを使用するペレットストーブは灯油ストーブより熱効率が高く、市の助成もあって、昨年はいわき市全体で50台以上が導入された。また、昨年度には、太陽光や風力発電といった多彩な新エネルギーを活用しているフラワーセンターの温室に、ペレットを利用したボイラーや温風器を導入。市民の環境意識の啓発にも役立っている。

こうした新エネルギーへの取り組みは、今後ますます必要性が高まってくると考えられている。市が環境産業の取り組みを後押しすることで、現在低迷している林業への波及効果や、さらなる民間事業者の意欲の醸成が期待されている。



右／精製前（右）と後（左）の廃食油。下／スーパー前での廃食油回収の様子。回収システムは、先駆者である京都市を参考にしている。



いわき市産業・港湾振興課
電話 0246-2211126
e-mail: sanyokowanshin@city.iwakitokushima.jp
URL: <http://www.city.iwakitokushima.jp>



うち92戸が導入し、「数で言うとなんく聞こえますが、導入率は5・1%、全国トップレベルじゃないかと思ひます」と、榊原町環境整備課長の岩本直也さんは言う。

「町環境基金」を使って、もうひとつ支援を行っているのが林業だ。町の面積に占める森林の割合は91%、そのうち73%が人工林で、手を入れなければ山は荒れてしまう。だが千枚田と同様、土地の所有者がほとんど高齢化し、自分では手入れができなくなっており、また組合や林業者に間伐をしてもらえば、かなりの出費になってしまうため、それもできずに放置されるままになっていた。

そこで町が基金から、1haの間伐に対して10万円を補助することを決定。この制度が始まってから、年間の間伐実績は600haから1000haにまでのびた。そして間伐材を公共施設の建築に利用するなどして、循環を図っている。

町の総合庁舎は「環境の町・榊原」を象徴する建物として、平成18年に

完成。格子状の「重ね梁」と呼ばれる構造を取り入れるなど、ふんだんに町原産の木を使い、木の庁舎としては日本最大級の大きさを誇る。屋根にはもちろん太陽光発電システムを取り入れている。

さらに地中熱を利用した温水プールも作った。地下100mまで掘削し、地中熱交換機で採熱した熱をヒートポンプに伝達、温水を作って、プールの加温、暖房などに使われている。プールは町民の健康保持のため、さまざまに利用されている。

風、太陽、森、大地と、あらゆる自然の恵みを活用した結果、町は活気づき、いまでは「日本で一番元気の出る町」と自負するまでになった。一見、厳しい立地条件を味方にするという逆転の発想で、環境と生活、経済の好循環が生まれている。



右頁／「千枚田オーナー制度」では、地元農家の指導を受けながら収穫が楽しめる。1区画（約100坪）の賃料は、四万十円にちなんで、年間4万10円。上／屋上に太陽光発電システムを設置した総合庁舎。木材を多用して建てられた。建物の設計は世界的に名高い隈研吾氏。左／樹齢数百年にもなる木々が生い茂る国有林に開かれた榊原町。



榊原町環境整備課
電話 0560-61-2111
e-mail: KIKAKU@town.yusuhara.kochi.jp
URL: <http://www.town.yusuhara.kochi.jp>